

特集「言語文化教育のポリティクス」

【寄稿論文】

寄稿論文について

ピエール・マルチネーズ氏の論文は、今回の「言語文化教育のポリティクス」という特集にあたり、本人からのご希望により寄稿いただいたものです。

マルティネーズ氏は、長くパリ第8大学（フランス）言語科学・言語教育部門の責任者の職にありました。2007年秋に私がパリ第8大学を訪ねた折に知り合い、以後、いくつかのシンポジウム等で顔を合わせました。2012年の言語文化教育研究会（本学会の前身）シンポジウムで基調講演をお願いしたことも、今回の寄稿につながっています（細川英雄、鄭京姫（編）（2013）『私はどのような教育実践をめざすのか——言語教育とアイデンティティ』春風社、に収録）。

氏は、アメリカはもとより、アフリカ、カリブのほか、ベトナムとの交流もあり、パリ8大退職後は、2010～2012年、韓国ソウル国立大学のフランス語教育部門長も務め、その後、短期間ですが、京都大学の客員教授でもありました。

大学カリキュラムと言語教育政策を専門とし、フランス・パリ3ソルボンヌ大学のDILTECとイナルコのPLIDAMのメンバーでもありました。主な著作には、クセジュ文庫に『外国語の教育』（*La Didactique des langues étrangères*, Paris, PUF, 1996. 2017年11月に第8版の出版予定）ほか多数あります。

本論文では、ヨーロッパでも複言語・複文化教育の実現が困難な背景が提示され、しかし、それゆえにこそ外国語の普及政策のための考え方として、「世界と他者を発見する」ための他の場所に駆り立てられる願望とその人間主義の教育、そして関係主義的なアプローチによる「網状の教育法」等が、長年の言語教育政策にかかわる経験から提案されています。

「言語文化教育のポリティクス」という特集のテーマに沿った、興味深い論文であると考え、仲介の労をとらせていただきました。忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

細川 英雄（言語文化教育研究所）

訳者から一言 日々の教育実践に追われ忘れがちであった自身の教育観を揺さぶり、改めて自分は何ぞ教育に携わるのか考える機会を与えてくれる論文でした。フランスと日本に限らず、世界の様々な土地で教育に携わっている方々との討論ができたらいいなと思っています。

高橋 希実（ボルドーモンテニュー大学）